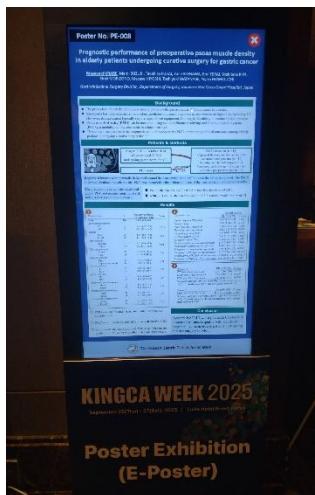


KINGCA WEEK 2025 感想記

大森赤十字病院 外科
浦辺雅之

まずは今回の参加にあたり、助成での多大なご支援をいただきましたこと、学会に心より感謝いたします。会の直前に大規模な空港ストライキが起きるとの憶測が流れ、行って帰ってこられなくなったらどうしようとヒヤヒヤしながら成り行きを見守っていましたが、蓋を開けてみれば大事にならなった様子で、天気にめぐまれたソウルを楽しむことができました。

さて、私個人としては、KINGCA week は今回で2回目の参加となります。前回の参加は2016で、その際は大学の教室の一員としての参加でしたが、今回は一市中病院から演題を出すことができたことは、まずひとつの自信となりました。



発表の内容は、高齢者胃癌手術症例における腸腰筋 CT 値と長期予後の関連をまとめたものです([doi: 10.2152/jmi.72.396](https://doi.org/10.2152/jmi.72.396))。今回は、残念ながら **discussion section** のない e-ポスターでしたが、ほかの演題からいくつかのヒントが得られましたので、次回はより上位のセッションに採択されるよう、新たな研究に取り組んでいきたいところです。

(←現地でちゃんと展示されていることを確認でき、ほっとしました。)



日韓に限らず多様な地域からの報告に触れ、たとえば、PIPACなど本邦では一般的ではない modality への見識を深めるよい機会にもなりました。国内の学会ですと、当然本邦で興味がもたれる治療にフォーカスがあたり、彼我の差を意識することは限られる……コロナが明けてからは初の海外学会参加でしたが、人的交流も含め、積極的に海外の学会に参加することの意義をあらためて確認した次第です。



ちなみに 2016 の写真が左(同じくロッテホテル)ですが、KLASSを中心とした、当時の臨床試験の進行状況がうかがわれ、時代のうつりかわりが感じられます。その KLASS もなんと第 14 弾まで進んでいる ([doi: 10.4174/astr.2025.108.1.1](https://doi.org/10.4174/astr.2025.108.1.1)) とのことで、胃癌診療における韓国の国際的貢献度の高さに、あらためて畏敬の念をいただきました。